

昼の罨

小林守城

哀しいかな人は
自身にかけた魔法の扉を
既に自分では開けない
開きたくない力が働いて
とんでもない悪夢になっても
合い鍵は他の誰かに
渡してしまっているのだ

哀しいかな人は
神のまねごとは
やめたほうがよかったのだ
しよせん人はうるわしく
人の囚われでしか
あり得ないのだ
もう昼は傾いていた

ほらほらこれがぼくの罨
(あれー？)

そこにいるのはだれ
三十年後のわたしが
呟いているのだ
庭におかれた輝く午後の
銀のテーブルに腰掛けて
見続けた自由の夢の罨を
開いたり閉じたりして